

特別収蔵展

「ポスターで見る 浜松文芸館のあゆみ」



11月18日(火)~3月3日(火)

『浜松文芸館』では、昭和63年4月の開館以来、多くの皆様にご来館いただくなかで、浜松市及び遠州地方にゆかりのある文芸に関する知識を広め、市民の皆様の文芸活動の振興を図るための事業を進めて参りました。

現在、来年度4月の移転に向け準備を進めておりますが、これまでの収蔵展・企画展等のポスターと関係資料等を展示し、広く市民の皆様に「浜松文芸館のあゆみ」と「浜松ゆかりの文芸人たちの業績」、「市民の皆様の文芸活動の様子」を知っていただく収蔵展を計画いたしました。

多くの皆様のご来館を、お待ちしております。

浜松文芸館『朗読会』終わる！

堤腰和余（K朗読研究会主宰）ひとり語り『藤沢周平を読む』が終わりました。

朗読の世界に引き込まれたひととき。充実した時間になりました。



企画展

「秋山鐵夫の絵と誌で紡ぐ癒しの空間」は、好評のうちに11月3日をもって終了いたしました。

子どもたちからお年寄りまで、多くの皆様にご来館いただき、ありがとうございました。『癒しの空間』はいかがでしたでしょうか？

文芸館の四季

晩秋から初冬へと季節は流れ、文芸館の駐車場に、風に吹かれながら色とりどりの葉が舞い落ちています。

来館者の方から「ツルウメモドキ」をいただきましたので、早速ロビーに飾らせていただきました。

ツルウメモドキのオレンジ色の間に、落ちているドングリで作ったフクロウを置いてみました。いかがでしょうか？

自然がいっぱいの「文芸館」で、手作りすることの楽しさも見つけました。



井上靖と浜松 6

「あすなろ物語」に描かれた浜松中学校時代の秀才鮎太

『あすなろ物語』の第2章「寒月がかかれば」は、浜松中学校と転校先の沼津中学校が舞台となっている。

中学三年生の鮎太は、静岡県西部の、県下最大の人口を有する工業都市の中学校では、秀才として通っていた。一年の時も、二年の時も、進級成績は抜群で、開校以来の秀才というような言葉が、教室で大人しい鮎太に好意を持つ国漢の教師の口から出されたりした。(略) 鮎太は一年生の間だけ家から通学したが、二年になった春、父の台北への転任と同時に寄宿舎へ入った。(略)

二学期の初めに直ぐにも転校は出来たが、十月に県下の各中学校の三年以上の、学年別の、総合試験が行われることになっており、そのコンクールに鮎太は他の二人の生徒と共に出場することに決まっていたので、鮎太としてはその権利を放棄するのは惜しかったのである。鮎太は他の二人の生徒と一緒に、二時間程汽車に乗って、県庁所在地のS市へ行って、其処の中学校の講堂で、各校から選抜された三十名ほどの生徒たちと成績を争った。鮎太は眼鏡をかけていなかったが、大部分の生徒が眼鏡をかけており、俯向いて歩く共通した癖を持っていた。

鮎太は試験問題が配られる前に、自分の席の周囲を見廻して、あまりいい気持はしなかった。揃いも揃って、薄い胸をした少年たちが、いやに眉をひそめた大人びた顔付きで、窓の方へ顔を向けたり、鉛筆の先きに眼を当てたりしていた。そして試験官が何か冗談を言ったが、誰一人笑わなかった。

試験の結果は鮎太が一番だった。その試験の結果が通達されて一週間目に、鮎太は新しい中学の校門をくぐった。

当時県内には、豆陽中学、葦山中学、沼津中学、静岡中学、榛原中学、掛川中学、浜松中学の7つの旧制中学校があった。鮎太は、郷里に近く親戚も多い沼津の中学校へ転校することになったのである。

浜松中学へ首席で入学した靖は、入学後も教師が一目置く優等生であった。一年の成績順位は4番、皆勤と学力コンクールの1番が評価されて、学年で2等賞を受けている。

2年次から、母八重と弟妹は父のいる台北に移ることになり、靖は郷里に近く親戚も多い沼津中学校に転校した。初めの1年は三島大社前の親戚の家から通学したが、2年目からは沼津市下河原の妙覚寺に預けられた。男勝りの寺の娘雪枝に鍛えられて、鮎太は逞しい男に成長していくが、学年が進むにつれて成績は急降下していった。

平成2年4月17日、「浜松一中・浜松北高100周年記念同窓会総会」での講演依頼に東京世田谷の自宅に井上靖を訪ねた小原侃之助佐久間町長ら5人の浜松北高同窓生に向かって、82歳の靖は「5年間浜松中学に在籍していれば、多分学者の道に進んでいたでしょう」「沼津中学で不良グループと交わり、酒と煙草をこよなく愛してしまった」と笑いながら語ったという。しかし、8か月後の平成3年1月29日、井上靖は国立がんセンターで逝去、楽しみにしていた同窓会に出席することはかなわなかった。